

牧師室から (2020.11.15)

プランターの忘れな草が葉は出たがなかなか咲かない。本来春先に咲く花なので、秋に種蒔きしたから無理かもしれない。なぜこれを蒔いたかという、こちらに赴任して間もなく、教会の庭に忘れ草が咲いたのに気づいたからだ。忘れ草があるなら、忘れな草もあつたらいいなという遊び心である。

忘れ草は万葉集にも詠まれており、その中に、「想いを寄せる人を忘れるために庭の垣根に植えたが、全然忘れられない、このバカ、役立たず！」というのがある。一方忘れな草の方には、西洋に名前の由来の逸話がある。騎士が恋人と川辺を散歩しているときに、騎士道精神から、咲いている小さな青い花を採って彼女にささげようとしたが、足を滑らせて川の中に落ちてそのまま流されてしまう。その際に「僕のことを忘れないでくれ」と言ってその花を投げたという。

神学生の時、指導牧師から「人の罪を忘れよ」という神学者(誰だか忘れたが)の言葉を教えて頂いた。他人の罪は忘れ、逆に受けた恩義は忘れずにとするのは人として大切なことであるのは言うまでもない。しかし忘れたほうがよい、人から受けた苦しみを忘れられず、かえっていつまでも感謝の心でもって忘れてはいけない人の恩を忘れてしまいがちなのは情けない。

やはり忘れな草の青い花は来春まで待つしかないのかな、と思いつつ水やりをしている。そして補色の忘れ草もその後また咲始めることであろう。

(鈴木淳一牧師)



(忘れな草)



(忘れ草)